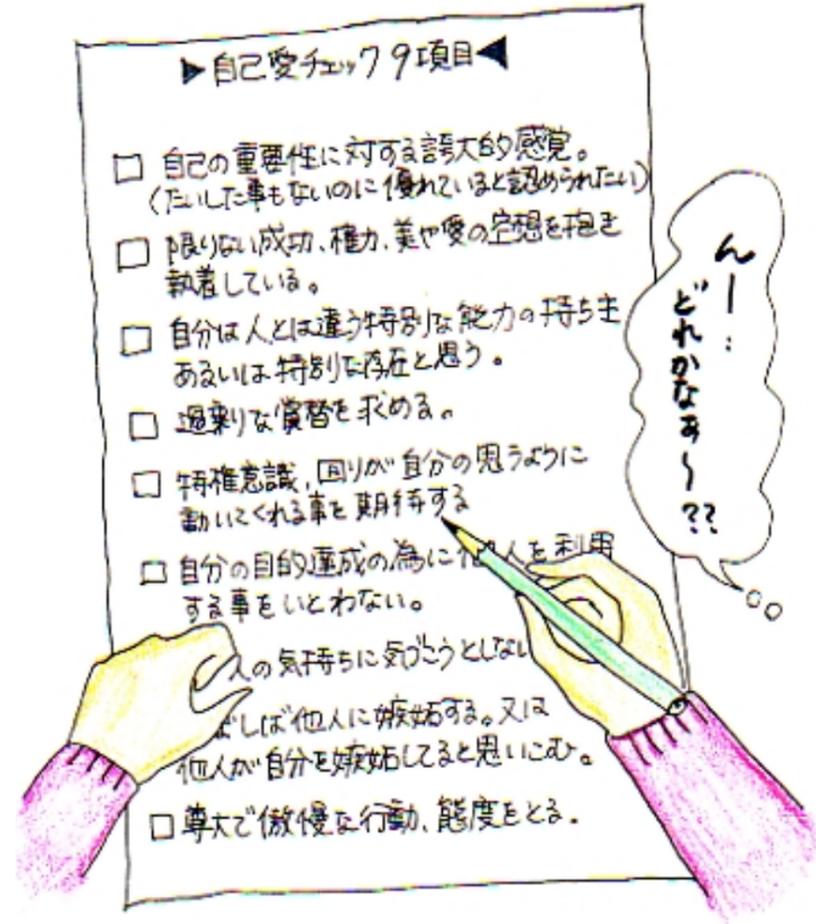


# 自己愛性人格障害

福島淳 イラスト・福島マルゲリータ



りをして「親切な女性」という印象をふりまく努力をする。こうして周囲から得た好意や称賛が自分の心を満たし、次のエネルギーとなるのだ。

もしこれで終わるなら、他人への害はない。しかし残念ながら自己愛の強い人はこれにとどまらな。理想的な自分であるとする意識が強すぎて他人の目に過敏になり、少しでも自分の意にそぐわない評価や批判を耳にしたり、人間関係がわずかでスムーズにいかなくなると、ひどく傷つくのだ。

しかも、被害者意識の強いタイプだとしたら、始末が悪い。他人の言動を悪い方へ悪い方へと膨らませる。もともと自己愛が強いにもかかわらず、自分はパランスのとれた人間という思い込みがあるだけに、「私がこんな目に遭う理由が分からない」と、相手に対する不満と怒りで頭が一杯になってくる。

こんな人の中には、だからこそそうならない為の気配りと努力がエスカレートするタイプもいる。結局、自分がどんな評価を得ているかを探るため、他人に親切に接しながら観察する。疑りを持って観察するからこそ、よけいに悪意のある解釈を繰り返す、という悪循環が起こる場合もある。

しかも、そんな悪循環もモノともしないほど、自己愛が強固なタイプもいる。こういう人は自分の理想に向かって自分本位に物事を解釈する傾向が非常に強く、他人の評価さえ自分の都合に合わせて解釈できるのだ。

もし、こういうタイプの女性が好きになった男性に、妻子がいたとしよう。好きになってしまったのは仕方がないとしても、分別のある女性なら他人の家庭を壊すほどの踏み込むことはしない。奥さんがいると知った時点で、恋愛の対象から消える」というのが、最も一般的ではないだろうか。

ところが自己愛が強いタイプは、男をつなぎ止めるために、本妻と張り合って子供を産むことができるのだ。もちろん、これには男性にも多大な責任があるのだ。女性側だけをとかやく言えない。が、あえて自己愛の猛烈に強い女性に焦点を絞っていうなら、あきらかに社会道徳からハズれた行為であるにも関わらず、特別な意識を持って自分の行為を正当化できるのだ。

「彼は私だけを愛している。」「私の産んだ子供こそ一番かわいいと思ってるハズ。」「奥さんにはできないことを私ならできる」などなど。

そんなタイプが本妻やその子供たちに与えるダメージは、精神的にも社会的にも大きい。自己愛性人格障害者と呼ぶかどうかは別として、精神的暴力の加害者であることには間違いない。映画「メソクロニヤ」の女仇役メレディス・ジョンソンと同じグループに分類されるというわけだ。

誰しも自分が一番大切であるが、越えてはならない一線というのをふまえて生きていく。パランスの壊れた人には、その一線が見えないのかも知れない。

前回は、自己愛と精神的暴力について書いた。今回は自己愛性人格障害者がいかに周りをふり回すか、精神的暴力をふるうか、それをテーマにした1994年のアメリカ映画「メソクロニヤ」(発覚)をあけてみよう。原作はジュラシックパークや、ERシリーズで有名なマイケル・クライトン氏だ。

マイケル・タケラス扮する主人公は、IT関連の製造会社「テジコム」の製造部長トム・サンタースで、合併後に新会社の副社長に内定していた。そこに「メソクロニヤ」の主人公メレディス・ジョンソンが乗り込んでくる。彼女は、トムが結婚するずっと前の恋人だった。

この女性は自己愛性人格障害者として、妻子のいる常識人トムとは対照的に描かれている。彼女の企みにより彼は新副社長の席を奪われてしまう。なんとメレディスはトムの上司となるのだ。

ある晩、彼女はトムを自分のオフィスに呼び、昔話をしながらセックスに誘う。トムは拒んで自己愛性人格障害者を怒らせてしまう。なんとメレディスは、トムにレイプされそうになった」と、会社の上部に訴えをおこすのだ。

トムは自分の汚名を晴らすことに成功するだけでなく、情報をかき集めて、周到に計画された彼女の策略を暴くのに成功する。しかし、メレディスはトムに負けずともかわらずリベンジをほのめかす。全くもって圧倒される彼女の強さの根源は、巨大な自己愛にある。自分ほど能力の高い人間が、負けたり失ったりする

などありえない。まさか落ち込むなどブライドが許さない。逆境を見事にエネルギーへと転換してしまつたのだ。

こういった自己愛性人格障害者から身を守るには、ひどく困難だ。社会的なしがらみがない関係なら逃げてしまえば終わるが、職場や学校や家庭など、簡単にリセットできない環境の中で相手となれば、相当の覚悟がいる。

次に、自己愛性人格障害者までには至らなくても、自己愛が非常に強いタイプは、どんな人だろうか。

自己の誇大的感覚。  
権力、成功、美、才能への執着。  
自分は人とは違う能力がある、という特別意識。  
過剰な称賛を求める。  
周囲が自分に従つてことを期待する。  
目的達成の為に他人を利用できる。  
他人の気持ちに気がつかず、気付こうともしない。

他人に嫉妬したり、逆に他人が自分に嫉妬していると思つて。  
尊大で傲慢な態度をとる。  
自己愛が強いこのタイプは、心の奥底で自分とはとてもパランスのとれた理想的な人間だという自己像を描いており、周囲にもそう認めてもらいたいため、良い人間に見られるよう、他人の目を意識する。しかも演じるだけでなく、自分で持つ自己のイメージを実現化させる努力も怠らない。

例えば、細やかに気がつく素敵な女性と賞賛されたいと思つたら、絶えず気配

